

国内経済情勢

概観

官公需、輸出はひとところに比べ増勢がやや鈍化し、企業の在庫投資も比較的ゆるやかな増加にとどまっているが、反面設備投資はこのところやや増勢を示し、個人消費も着実に増加している。このような需要の増大にささえられて、生産活動は根強い拡大を続けており、これに伴って労働力需給も引き締まり傾向をたどっている。また、商品市況も主力商品の一部が小反発に転ずるなど、全体として強含み基調で推移している。

このような情勢のもとで、9月期決算企業の経常利益は大幅な増加を示したが、業績回復の割には決算態度は慎重で、増配企業は比較的少数にとどまっている。

一方、金融面では、金融機関の貸出態度は依然積極さを失っていないが、大企業の借入需要は総じて落ち着きを保っており、貸出金利も低下を続けている。

この間にあって、10月の国際収支は、輸出の伸び悩み、輸入の増勢持続から貿易収支の黒字幅が縮小し、資本収支の大幅逆調、期末期初の影響も加わって、総合収支は1百万ドルの黒字となった。

生産、出荷は引き続き増加

鉱工業生産(季節調整済み)は、9月の大幅増のあと、10月も速報で+0.7%と小幅ながら増加し、

8か月にわたる続伸となった。この結果、10月の生産は、年初来16%増の高水準に達したが、この間における出荷の伸び(+16%)を考慮すると、生産はおおむね需要動向に対応した動きを示しているとみられ、生産が出荷の増加を相当上回って伸び続けた38年当時とはかなり様相を異にしている。

10月の生産を財別にみると、前月著増した輸送機械や耐久消費財は減少し、生産財も若干伸び悩んだが、電気機械の急増を中心に一般資本財はかなりの増加となった。

一方、10月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比+2.4%の大幅増加を示し、ここ数か月ぶりに生産の増勢を上回った。かかる出荷の好調は、一般資本財特に電気機械の急増が大きく響いているが、このほか、輸送機械、生産財、消費財とも軒並み着実に増加した。

10月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比-1.0%と3か月ぶりに減少したが、特に前月に増加した輸送機械(トラック、バス)や耐久消費財(民生用電気機械、精密機械)は大幅に減少している。こうした出荷、在庫の動きを映じて、製品在庫率も前月比-3.2%と相当低下した。原材料在庫や販売業者在庫についても在庫率の水準がこのところ低下ぎみに推移していることなどからみても、企業の在庫投資は総体として比較的ゆるやかな増加にとどまっているように思われる。

他方、設備投資は、業種によって事情は区々な

がら、総じてこのところやや増勢を示している。先行指標である機械受注のうち、海運、電力を除く民需は4～6月+2.2%、7～9月+6.7%、10月+17.9%と上向く傾向にあり、11月調査の本行「主要企業短期経済観測」、「中小企業短期経済観測」や企画庁の機械受注の見通し調査の結果などから推しても、当面増勢が続くものとみられる。

なお、経済活動の活発化につれ、所定外労働時間の増勢が続く一方で、新規求人も引き続き増加しており、このような一般労働力需給の引き締まり傾向を背景に、全産業の定例給与(季節調整済み)は4～6月の+2.6%に続いて、7～9月は+3.3%と徐々に水準を高めてきている。

商品市況は大勢強含み

最近の商品市況をみると、石油など一部の品目は依然下押し商状を続けているものの、セメント、基礎薬品類、洋紙、非鉄(銅)などは季節需要の本格化も加わって引き続き堅調に推移し、また、8月末以降訂正安商状を続けてきた鉄鋼、繊維の主力商品も10月来下げ一服となり、なかには小反発に転ずる動きもみられる。

このように、商況の基調は需要の着実な増大を背景に全体として再び堅調味を増してきているようにうかがわれるが、こうしたなかで鉄鋼をはじめ、セメント、紙、化学など多くの業種では、生産態度をかなり積極化している。商品市況はここしばらくは派手な値動きをみせないまま、総じて強含み程度で推移するものとみられる。

10月の本行卸売物価は非鉄、木材などの値上がりから前月比+0.6%と再び上昇し、11月にはいつてからも、鉄鋼、繊維の反騰も加わって上旬は前旬比+0.2%、中旬は+0.1%と続騰している。なお、非鉄、食料を除いてみても、10月+0.1%

のあと11月上旬+0.2%、中旬+0.1%と強含みに推移している。

一方、消費者物価(東京、新指数)は、10月には前月比+0.7%続騰したあと、11月は食料、光熱などの値下がりが響いて-0.7%の反落となった。しかし、季節商品を除いてみると、10月+0.2%、11月+0.1%と微騰を続けている。

銀行の資金ポジションは漸次悪化

10月の銀行券は、前年同月を大幅に上回る増発(437億円、前年同月200億円)となり、他方、季節的散超期にはいった財政資金は、国債発行代り金の受入れが多額(789億円)にのぼったこともあって払超額は941億円と前年(1,574億円払超)を大きく下回った。このような情勢に対処し、本行は余剰資金吸収のため約670億円の債券売却(前年同月債券と手形の売却計約1,900億円、本行貸出増加額約650億円)を行なったが、金融市場は月末接近に伴う小締まりを別にすれば、おおむね平穩裡に推移した。なお銀行券は商取引の活発化や個人消費の堅調を映じて増勢を続けており、10月の月中平均発行高の前年同月比増加率は+15.3%と前月の水準(+15.1%)をやや上回った。

10月の全国銀行貸出は、前年(584億円増加)とは様変わりになり120億円の減少となった。これは、前月、期末預金増強との兼ね合いで貸し進んだことの反動減によるところが大きく、この両月を通計してみると、貸出増加額は前年同期を2割方上回っている。ただ、長期信用銀行や信託銀行(信託勘定)の貸出増加額は依然不勢裡にあり、また中小企業金融機関貸出もひとところに比べ増勢が鈍化している。

一方、全国銀行の預金は、企業の手元現預金水準の回復一巡や債務者預金の歩どまり低下など、

預金環境がひとところほど好調でなくなっていることから伸び悩んでおり、9、10月を通じてみると、実質預金増加額は前年同期の約2割減となっている。

このような預、貸金の動きから、銀行の資金ポジションは悪化しつつあるが、銀行の融資態度には貸出内容の低下に対する懸念もあって、一部にやや慎重化の動きもみられるものの、総じてみれば積極さが失われていない。これに対し、企業の借入需要は、中小企業では引き続き底堅い動きをみせているが、大企業では大勢としてなお落着き模様を改めておらず、貸出金利も低下を続けている。

なお、公社債市況は、都銀の手持ち債売却の手控えや年末金融の見通しがついたことなどから、8月末来の小反落商状は当面一服気配となり、このところ政保債を中心にむしろ強含みとなっている。

輸出の伸び悩み、輸入の増勢続く

10月の国際収支(IMF方式)をみると、輸出の伸び悩み、輸入の増勢が続いたため、貿易収支の受超幅が縮小したことに加え、資本収支の大幅逆調、期末期初の影響もあって、総合収支は1百万ドルの黒字となった。なお、金融勘定では、為替銀行の短期資産・負債バランスは鉄鋼の借入期間短縮に伴う輸入ユーザンスの減少や短期外資の流出増などから引き続き好転したが、他方外貨準備は25百万ドルの減少となった。

10月の輸出は、前年同月比で+20%となったが、季節調整後の実勢では前月比-2%と伸び悩んでおり、3ヵ月移動平均(季節調整後)でも、7月-0.1%、8月+1.2%、9月-0.5%とこのところ伸び率はかなり鈍化している。通関ベースで商品別の動きをみると、電気機械、自動車、光学機械、合繊織物などが好調を続けている反面、鉄鋼は依然停滞ぎみであり、また、前月急増した船舶もその反動から若干減少した。地域別では、米国向けが前年同月比+19%と高水準を続けているが、前年の水準が鉄鋼備蓄買いの反動減からかなり低目となっている点を考慮すると、やや伸び悩んでいるものとみられる。なお、先行指標である輸出信用状(季節調整済み)は、10月も前月に続いて減勢を示しており、当面輸出の伸び悩み傾向が続くものと思われる。

一方、10月の輸入は、前年同月比+28%、季節調整済みで前月比+3%と根強い増加を示し、6、7月ごろの水準を1割方上回った。商品別(通関ベース)の動きをみると、ここ数ヵ月来急増を続けてきた小麦、とうもろこしなどの輸入は多少減少したものの、鉄鉱石、鉄鋼くず、石油、繊維原料などはかなり増加した。このように、輸入はこのところ高水準を続けているが、輸入関連産業の生産が根強い増勢を示していることや輸入先行指標の動きなどからみて、原燃料を中心に輸入の増勢は続くものとみられる。

(昭和41年12月2日)